

---

# 火、儚げ

uzmz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

火、儂げ

### 【Nコード】

N4237Z

### 【作者名】

uzmz

### 【あらすじ】

神様トンボ、極楽トンボ。

ゆらゆらと揺れるその姿は、何とも頼りない。

だからこそ、人はその魅力に取り付けられるのだろうか。

## (前書き)

八月十日、スカイプで通話をしていたところ、短時間で小説を書くという流れになりました。

- ・三十分以内に書くこと
  - ・火、儚げ、鬼、幻想のキーワードのうち、二つ以上盛り込むこと
- という条件でしたが、制限時間は十五分ほど破りました。遅筆です。

クーラーの風に当たっていると、元気な鉄砲玉が家に飛び込んできた。

真夏の日差しに当てられて、その肌は真っ黒だ。ついでに虫刺されやかき傷で足はかさぶただらけなのだが、当の本人はまったくお構いなしに虫取り網を得意げに掲げている。

「お父さん、これ見て。トンボ捕まえたよ」

しゃがみこんで子供の小さな手を覗き込むと、くしゃくしゃになった昆虫と目があった。

若干ひしゃげているが、羽は四枚。細い胴体はわずかに上下しており、まだ生きているようだとし安んじた。

「これはトンボじゃないね。カゲロウだ」

「え、かげろう?」

息子は全く意味が分かってない様子でつぶやいた。その口調から聞いたことが無いのだろうと予想する。

「この虫をどこかで見たことはあるか?」

「うん。この前のね、キャンプファイヤーの時。祐ちゃんの肩に止まって大騒ぎだったよ」

「そうか。火の明るさにつられてきたんだろう。たくさん虫が明るいとところに集まってくるからね」

「お父さん、これどんな虫?」

用意していた緑色の虫かごに、無造作に放り込みながら息子は問いかける。ぐったりとした様子でまったく逃げようとしないうかがロウを見つめながら、どうにかしてこの虫を救えないかと頭をめぐらせた。

「カゲロウはね、大人になったら本当に少しの間しか生きられない虫なんだ。こいつの口には穴が無いだから、ほんの二、三週間しか生きられないんだよ。そのほんの短い時間で、メスを見つけて交尾

をするんだ。メスもメスで、子供を産んだら死んでしまうんだよ。だから、カブトムシなんかと違ってうちでは飼えないよ。」

プラスチックで出来た編みかごは、通気性がいいが見通しは悪い。ほとんど目をくつつけるようにして凝視していた息子は、自分で質問してきたくせにフーンとやる気のない返事しかしない。

「ねえ、これは幼虫のときはどんな格好してたの？ やっぱリイモムシみたいな形かなあ」

「いや、カゲロウはアリジコクだね」

「アリジコク？ 砂に穴を掘ってアリとか食べるやつだよ。祐ちやんちの庭にたくさん居たよ」

「そう、それだ。子供の頃は元気なだけだなあ。大人になる頃は、もう死ぬ寸前だな。もっと詳しく知りたかったら、図鑑を持ってきなさい。この前買っただろう」

はあい、と大きな返事と共に、息子はばたばたと子供部屋に駆け去っていった。その小さな背中を見送ってから、緑の箱に目をやる。

なんと儂い虫だろうか。子供の時は力強く他の昆虫を捕食していても、成虫は食事すらできない。メスの腹を割いてみたら、びっしりと卵が詰まっているのだろう。未来へ全てを託せればいい。その短い命はなんとも儂げで、だからこそ魅力的なのだろう。

「お父さん！ お父さん！」

物思いにふけっていると、家の中なのに無意味に大きな声を出しながら息子が駆け戻ってきた。その手には子供用の文字が大きな図鑑が握られている。

目の前まで来ると、得意げな顔をしてぱつとあるページを指差してみせた。

「お父さん、間違ってるよ。アリジコクの成虫なら、もっと生きるって書いてあるよ」

「……え？」

ほらここ、と小さな指の指し示す先を見ると、たしかにそのような記述があった。

『カゲロウは命が短い虫として有名ですが、アリジコクの成虫は二、三ヶ月は生きています。幼虫時代が二年ほどあることを考えると、長寿な虫ですらあります』

「お父さんよりも僕の方が物知りだったね！」

えっへん、と胸を張る息子から、苦笑いをして視線をそらした。

とりあえず、しみじみとかみ締めた虚しさは、もう感じなくなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4237z/>

---

火、儂げ

2011年12月14日19時51分発行